



令和6年度金沢大学資料館特別展

古代エジプト 3000年 の墓地进行掘る

エジプト、サツカラ遺跡発掘調査最新報告展



目次

古代エジプト略年表	2
ごあいさつ	3
第1章 サッカラ遺跡の概要	4
第2章 発掘調査の経緯	5
第3章 初期王朝時代の岩窟墓	6
COLUMN 古代エジプトの墓	7
第4章 新王国時代第18王朝の土壙墓	8
COLUMN 古代エジプトの来世観	9
第5章 末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の墓	10
COLUMN ミイラ製作	11
第6章 グレコ・ローマン時代のカタコンベ	12
COLUMN テラコッタ製像	14
TOPICS 考古学の発掘調査	15
多岐にわたる発掘調査の作業	16
おわりに	17
協力者・協力機関，執筆者，主要参考文献	18



表紙画像

上：第18王朝の土壙墓からの出土遺物（一部）

左：テラコッタ製

イシス=アフロディーテ女神像

中央下：カルトナーージュ製 ミイラマスク

右下：メネラオスのステラ

〈古代エジプト全図〉

先史時代・先王朝時代	初期王朝時代	古王国時代	第1中間期
前5500～前3000	前3000～前2686	前2686～前2181	前2181～前2055
バダリ期 前5500～前4000年頃 アムラー期(ナカダI期) 前4000～前3500年頃 ゲルゼー期(ナカダII期) 前3500～前3200年頃 ナカダIII期(原王朝) 前3200～前3000年頃	第1王朝 前3000～前2890年頃 第2王朝 前2890～前2686年頃	第3王朝 前2686～前2613年頃 第4王朝 前2613～前2494年頃 第5王朝 前2494～前2345年頃 第6王朝 前2345～前2181年頃	第7王朝・第8王朝 前2181～前2125年頃 第9王朝・第10王朝 (ヘラクレオポリス朝) 前2160～前2025年頃 第11王朝(テーベのみ) 前2125～前2055年頃
中王国時代	第2中間期	新王国時代	第3中間期
前2055～前1650	前1750～前1550	前1550～前1069	前1069～前656
第11王朝(エジプト全土) 前2055～前1985年頃 第12王朝 前1985～前1795年頃 第13王朝 前1795～前1650年頃	第14王朝 前1750～前1650年頃 第15王朝(ヒクソス王朝) 前1650～前1550年頃 第16王朝・第17王朝 前1650～前1550年頃	第18王朝 前1550～前1295年頃 第19王朝 前1295～前1186年頃 第20王朝 前1186～前1069年頃	第21王朝 前1069～前945年頃 第22王朝 前945～前715年頃 第23王朝 前818～前715年頃 第24王朝 前727～前715年頃 第25王朝(クシュ朝) 前716～前656年頃
末期王朝時代	プトレマイオス朝時代	ローマ支配時代	
前664～前332	前332～前30	前30～後395	
第26王朝(サイス朝) 前664～前525年頃 第27王朝 (第1次ペルシア支配時代) 前525～前404年頃 第28王朝 前404～前399年頃 第29王朝 前399～前380年頃 第30王朝 前380～前343年頃 第31王朝 (第2次ペルシア支配時代) 前343～前332年頃			

〈古代エジプト略年表〉

ごあいさつ

このたびは、令和6年度金沢大学資料館特別展「古代エジプト3000年の墓を掘る－エジプト、サッカラ遺跡発掘調査最新報告展－」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

本展示は、金沢大学古代文明・文化資源学研究所とエジプト観光考古省の合同調査隊によるサッカラ遺跡の発掘調査の成果速報展です。当館の夏の特別展は、実に2年ぶりとなります。本学の古代文明・文化資源学研究所長、新学術創成研究機構教授であり、当館の教育・展示部門長である河合望教授を中心とする発掘調査隊の最新情報を盛り込んでおり、まさに「特別展」と呼ぶにふさわしい展示内容になっております。

目玉展示であるカタコンベの実物大模型や、3Dスキャニング映像、現地の写真パネルなどとともに、古代エジプトの風を少しでも感じていただければ幸いです。

最後に、駐日エジプト・アラブ共和国大使館文化・教育・科学局、エジプト・アラブ共和国観光考古省、朝日新聞社、TOPPANをはじめ、本企画展に多大なご協力をいただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

2024（令和6）年7月25日

金沢大学資料館長 足立拓朗

【凡例】

- ・本書は、金沢大学資料館主催、金沢大学古代文明・文化資源学研究所、金沢大学新学術創成研究機構共催による令和6年度金沢大学資料館特別展「古代エジプト3000年の墓を掘る－エジプト、サッカラ遺跡発掘調査最新報告展－」の開催に合わせて作成した展示図録である。
- ・本書の構成と展示の構成は、一部異なる。
- ・本書の作成にあたっては、金沢大学新学術創成研究機構の河合望教授が主に執筆を担当し（他の執筆者は、奥付に明記）、金沢大学資料館が編集を行った。
- ・本特別展の開催と本書の作成にあたって、岡部 陸（金沢大学人間社会環境研究科博士後期課程）、進藤瑞生（金沢大学人間社会環境研究科博士後期課程）、駐日エジプト・アラブ共和国大使館文化・教育・科学局、エジプト・アラブ共和国観光考古省、朝日新聞社、TOPPANの各氏、各機関に多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
- ・本展示に係る調査研究は、日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究（A）「エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究」（課題番号23H00014）（研究代表者：金沢大学・河合望）の助成によるものである。

第1章・サッカラ遺跡の概要

An Overview of the Saqqara Necropolis

サッカラ遺跡は、エジプトの首都カイロから南に約30キロの砂漠の台地に位置する古代エジプト有数の大規模墓地である。その規模は南北7キロ、東西2キロであり、古代エジプト王朝時代開闢の紀元前3000年頃からローマ支配時代の2世紀頃までエジプト屈指の重要な墓地であった。現在では、世界遺産「メンフィスとその墓地遺跡」（1979年登録）の主要なエリアとなっている（図1）。

サッカラ遺跡で最古の墓地は、北部の台地の際に造営された初期王朝時代（前3000年頃～2686年頃）のmastaba墓群である。mastabaとはアラビア語でベンチを意味し、墓の上部構造がプラットフォーム状だったので、mastabaと呼ばれるようになった。初期王朝時代のmastaba墓群は、主に当時隣接する緑地の縁辺部にあった首都メンフィスの高官の墓群であった（図2）。

サッカラ遺跡で最大の遺構は、古王国時代第3王朝のジェセル王（前2680年頃）の階段ピラミッドである（図3）。これはエジプト最古のピラミッドであるが、最初は石造のmastaba墓だったのが上部にmastabaを重ねるように拡張され、最終的には6段の階段ピラミッドとなった。ジェセル王の階段ピラミッドの規模は平面が南北140メートル、東西110メートル、高さは62.5メートルである。そして、周壁の規模は、南北545メートル、東西277メートルで内部に王位更新祭の祭殿を石造で模倣した様々な施設が配されている。

その後の古王国時代では、第5王朝初代のウセルカフ王（前2494～2487年頃）がジェセル王の階段ピラミッド複合体の北東角付近にピラミッドを建設した。これは同王による伝統への回帰と解釈されている。そして、同じく第5王朝のウナス王は階段ピラミッド複合体の南西角にピラミッドを造営し、初めて埋葬室内部に「ピラミッド・テキスト」が刻まれた。古王国時代の衰退とともに、メンフィスが首都ではなくなり、長い間サッカラでは造墓活動が停滞したが、新王国時代第18王朝になるとメンフィスが再び首都となった。我々の調査では、第18王朝最初期の複数の墓を発見し、これまで不明であった新王国時代の墓地の形成に関連する新資料を得ることができた。第18王朝のアクエンアテン王（前1352～1336年頃）の時代にアマルナに遷都されたが、ツタンカーメン王（前1336～1327年頃）が再びメンフィスに首都を遷して以降、サッカラでの造墓活動が活発化し、多数の高官がトゥーム・チャペル（祠堂を持つ墓）を造営するようになった（図4）。

この頃サッカラでは、首都メンフィスの主神プタハの聖なる牛であるアピスの墓地が造られるようになり、第3中間期から末期王朝にかけて巨大な地下墓地セラペウムが造営された。また、末期王朝時代からグレコ・ローマン時代にかけては、神々の聖獣であった動物墓地が多数造られた。そして、我々の調査によって初めてプトレマイオス朝時代末からローマ支配時代のカタコンベ（地下集団墓地）が発見され、ローマ支配時代におけるサッカラ遺跡の様相が解明されつつある。



図1 サッカラ遺跡遠景 ©Nozomu Kawai



図2 初期王朝時代の大型mastaba墓
© Nozomu Kawai



図3 ジェセル王の階段ピラミッド
© Nozomu Kawai



図4 新王国時代のトゥーム・チャペル、ツタンカーメン王の財務長官、マヤの墓
© Nozomu Kawai

第2章 ■ 発掘調査の経緯

The Background of the Excavation

サッカラ遺跡は、前 3000 年頃の王朝の開闢より首都となり古代エジプト史を通じて行政の中心であった都市メンフィスの主要な墓地である。これまでの当該遺跡での発掘調査は、サッカラ台地の上に造営されたピラミッド群や大型マスタバ墓をはじめとする初期王朝時代や古王国時代の王族や高官墓の発掘調査が中心であり、20 世紀末になってようやく新王国時代の墓地の発掘調査が実施されるようになり、ツタンカーメン王やラメセス 2 世（前 1279 ～ 1213 年頃）の時代の高官の墓が発見された。一方で、新王国時代の国家神アメンの聖地であるテーベ（現在のルクソール）のネクロポリス（巨大墓地）の調査は約 200 年に及ぶ長い歴史があり、従来の新王国時代史はテーベ出土の豊富な資料を中心に考察されてきたと言っても過言ではない。つまり、テーベの出土資料だけでなく、サッカラの出土資料を合わせてよりバランスの取れた新王国時代史の再構築が必要である。このような状況に鑑みて、2015 年度からサッカラ・ネクロポリスにおける新王国時代の墓地の調査研究を開始した。

まずサッカラ遺跡北部の約 80 ヘクタールを踏査した結果、新たに台地上に約 10 ヘクタールの新王国時代の墓地を確認するとともに、東側斜面に新王国時代の墓地が存在する可能性が高いとの結論に至った（図 1）。そして、測量と物理探査を実施した後、2017 年に試掘調査を開始し、新王国時代第 18 王朝に年代づけられる遺物を包含する層を確認したが、同時代の遺構の検出には至らなかった。そして、2019 年に実施した 2 回の発掘調査では、グレコ・ローマン時代のカタコンベ（地下集団墓地）を発見した（図 2）。これを受け、サッカラ遺跡の発掘調査による古代エジプトの埋葬文化の変容を新たな調査目的とした。そして、コロナ禍による約 4 年間の調査の中断の後、2023 年 8 月に再び本格的な発掘調査を再開し、本来の調査目的であった新王国時代の墓を含む古代エジプト約 3000 年間の初期王朝時代からローマ支配時代にかけてのさまざまな時代の墓を検出した（図 3、図 4）。この成果については今年の 1 月に国内外で広く報道された。これらの出土資料は、考古学、文献学、美術史学、建築史学、形質人類学、パレオゲノミクス（古代ゲノム学）、分析化学、保存科学、保存修復学などのさまざまな分野の研究者によって文理医融合の研究が進められており、古代エジプトの埋葬文化の変容についての新たな研究成果が期待されている。

なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究（A）「エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究」（課題番号 23H00014）（研究代表者：金沢大学・河合 望）の助成によるものである。



図1 サッカラ遺跡北部の踏査エリアの衛星画像 © Google Earth



図2 カタコンベ外観
©North Saqqara Project



図3 2023年9月の調査時の発掘現場
©North Saqqara Project



図4 2023年9月の調査地区*オルソ画像平面図
©North Saqqara Project
*オルソ画像：写真測量で補正した画像

第3章 ・ 初期王朝時代の岩窟墓

The Early Dynastic Rock-cut Tomb

サッカラ遺跡は、古代エジプト最初の首都が置かれたメンフィスの主要な墓地である。初期王朝時代のメンフィスの位置については、北サッカラ台地の東側に広がる耕地の縁辺部に位置していたと考えられており、ちょうど現在のアブ・シール村の場所にあたる。これまで初期王朝時代の高官の墓が北サッカラ台地の東端部に位置することが知られており、1950年代に英国の考古学者ウォルター・エメリー（1903～1971年）によって大規模な発掘調査が行われた。この調査で発見された墓はマスタバ（アラビア語で「ベンチ」の意）と呼ばれ、上部構造がプラットフォーム状を呈しており、日干レンガ製で南北50メートル、東西25メートルを超える平面プランを持つ巨大な遺構であった。このような大型の墓は当時のメンフィスの王宮に仕えていた高官の墓と考えられており、複数発見されている。

今回我々の調査で発見された岩窟墓は、おそらく第2王朝から第3王朝初頭に年代づけられる墓である。これまでは前述の北サッカラ台地の東端部に位置する日干レンガ製の大型マスタバ墓が初期王朝時代の墓として知られているが、東側斜面から同時代の岩窟墓が発見されたのは初めてのことである。岩窟墓はカタコンベから南に約5メートルに位置する石灰岩岩盤の露頭に^{うが}穿たれ（図1）、奥行き約130センチメートル、幅95～130センチメートル、高さ70～80センチメートルを計る小型の規模である（図2）。内部では長年の経年劣化とシロアリによる被害を受けた箱型木棺に収められた屈葬の遺体が検出された。屈葬は前4000年から3500年頃の先王朝時代ナカダI期からの埋葬姿勢であり、古王国時代第3王朝頃まで続いた。一説によれば、この姿勢は胎児が母親の羊水に入っていた時の姿勢で、この姿勢で埋葬することにより来世で復活すると考えられたと推測されている。また、箱型木棺は古代エジプトの木棺の最初期の形態である。出土遺物で特徴的なものは、エジプト・アラバスター（方解石の一種）製の皿であり、割れた状態で出土した。接合して精査したところ、初期王朝時代第2王朝から第3王朝初頭に年代づけられることが判明し、墓と埋葬の年代を示した（図3）。今回の発見により、初期王朝時代には斜面にも墓が造営されていたことが明らかとなり、初期王朝時代における墓地の形成について新知見を得ることができた。



図1 初期王朝時代の岩窟墓外観
© North Saqqara Project



図3 エジプト・アラバスター製の皿形容器（接合後）
© North Saqqara Project

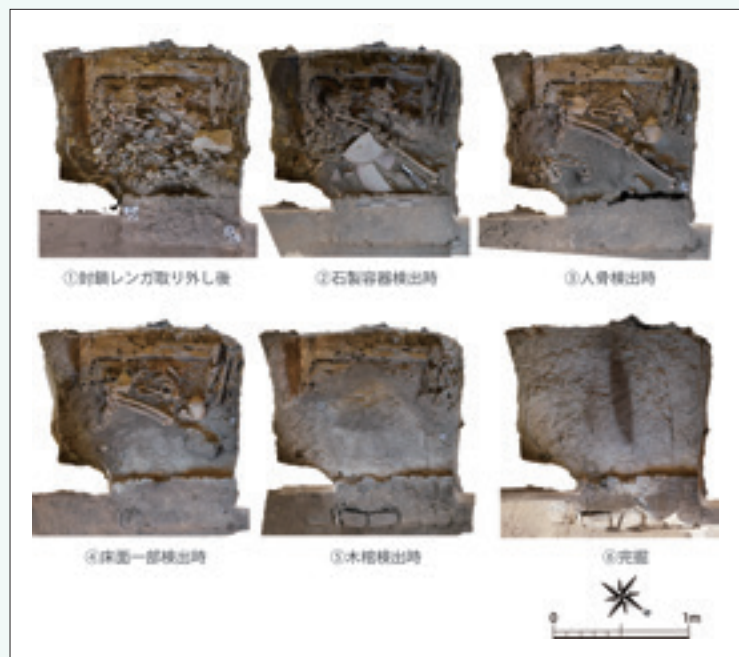


図2 初期王朝時代の岩窟墓の埋葬（クリーニングの過程）© North Saqqara Project

COLUMN

古代エジプトの墓 The Tombs in Ancient Egypt

巨大なピラミッド、ツタンカーメン王墓の豪華な副葬品、極彩色の壁画や棺、精巧に作られたミイラなど今日に残る古代エジプト文明の遺産の多くは、墓や埋葬に関わるものである。そのため、古代エジプト人は来世に執着していたと誤解されることが多い。ところが、古代エジプト人は現世での生活に喜びや幸せを感じ、来世でも同じ暮らしを続けたいと願っていた。つまり、来世でなく現世に執着していたのである。しかし、豪華な墓や豊富な副葬品はあくまでも王や支配層のものがほとんどであり、庶民の埋葬は比較的簡素で王や支配層と同じような思想をもっていたかは疑わしい。

前3500年頃の先王朝時代には遺体は体を折り曲げた姿勢で砂漠に浅く掘られた穴に埋葬された(図1)。遺体の上には砂がかけられただけだったため、砂の熱が遺体の水分を奪うことで細菌が繁殖することなく、遺体は腐敗せず自然にミイラ化したのである。

前3000年頃に統一王朝が成立し、王や高官がアビドスやサッカラで大規模で壮麗な墓を造営するようになると、墓室の拡大に伴い、埋葬される遺体は地下の空間に納められたため、遺体を穴に埋めた先王朝時代とは異なり、自然に腐敗するようになってしまった。また、遺体が棺に納められるようになったことも腐敗を促したと考えられる。このように遺体の腐敗が進んだことで、ミイラ製作の技術が発展した。

古王国時代になると王は巨大なピラミッドを建設するようになり、貴族は石造の墓を造営するようになった(図2)。墓に付属する葬祭殿や祠堂の壁面には供物を捧げる場面や生活の場面を表した彩色レリーフが施されるようになった。この頃から屈葬はあまり見られなくなり、手足を伸ばした伸展葬が一般的となった。またこの頃から遺体を亜麻布でしっかり巻くようになってきた。おそらく遺体を埋葬室に納めた結果腐敗が進んだので、遺体を慎重に亜麻布で包んでおけば腐敗を抑えることができると考えたのであろう。

新王国時代になるともはや王はピラミッドを建設しなくなり、盗掘を避けるために岩山の奥深くに墓を穿つようになった。これが王家の谷の王墓である。内部には極彩色の壁画が描かれ、豪華な副葬品が納められた(図3)。

古代エジプトの王朝時代を通じて支配者や高官は豪華な墓を造営し、埋葬室に多くの副葬品を納めた。また遺体から胃、腸、肺、肝臓を摘出しカノポス壺と呼ばれる内臓を納める容器に入れるといった処置が施されたが、サッカラ遺跡で我々が発掘した非エリートの人々の墓ではそのような厚葬ではなく、単純な土坑に木棺に納められたミイラとわずかな副葬品を納めたものばかりである。古代エジプトの社会を知るためには王や貴族だけでなく、こうした人々の埋葬も合わせて調査研究することが重要である。



図1 先王朝時代の屈葬(大英博物館蔵)
© Nozomu Kawai



図2 ギザの三大ピラミッド, 古王国時代,
第4王朝 © Nozomu Kawai



図3 ラメセス6世王墓の玄室の天井の壁画,
新王国時代, 第20王朝
© Nozomu Kawai

第4章 ■ 新王国時代第18王朝の土壙墓^{どこうぼ}

New Kingdom, the 18th Dynasty Pit Burials

新王国時代は広大な領土を誇り、豪華な神殿や墓、高水準の芸術様式などから古代エジプトの最盛期と言われる。この時代には極彩色の壁画やツタンカーメン王墓（図1）のように大量の副葬品を有する墓が有名だが、これらは王墓や高官墓の特徴である。一方で、土壙墓とは一般的に地面に穴を掘りそこに遺体を埋葬する墓を指す。当時エジプトで生活した人々の大半は副葬品も少なく簡素に穴を掘った土壙墓に埋葬されたと考えられている。そのため土壙墓は古代エジプトの埋葬習慣の全容を理解する上で重要な墓の一形式と言える。

サッカラ遺跡でも新王国時代の土壙墓が複数あったことが過去の発掘調査からわかっている。これらの調査から新王国時代の土壙墓が、それより1000年近く前のファラオである古王国時代第6王朝のティ王（前2345年～2323年頃）のピラミッドの北側に集中していたことが判明している。しかし、金沢大学とエジプト観光考古省の合同調査により従来の墓域から離れた場所で新たに複数の新王国時代の土壙墓を発見した。この発見はサッカラ遺跡において新王国時代の土壙墓が様々な墓域に埋葬されていたことを明らかにした大きな成果である。これらの土壙墓からは、埋葬された人骨や副葬品として木棺や土器、石製容器、装飾品などが検出された（図2）。過去の調査で報告された土器の形や木棺の彩色の特徴から検討したところ、発見された土壙墓は新王国時代の中でも最初期にあたる18王朝前半のものと考えられる。なかでも、土壙墓の1つではツタンカーメン王の棺にも装飾されているような鳥の羽根（アラビア語で「リシ」）の装飾が施されたリシ棺の破片が出土し、サッカラ遺跡でも2例目となる発見となった。これは第18王朝最初期に年代づけられる棺である（図3、図4）。

第18王朝前半はそれまで混乱していた国内を統一し、歴史上もっとも繁栄する時代へと至る移行期に当たる。我々の調査で、この最盛期へと至るプロセスを埋葬習慣という側面から明らかにできる可能性があるため国内外から注目される発掘成果を得た。



図1 ツタンカーメン王墓、テーベ西岸、王家の谷 © Nozomu Kawai

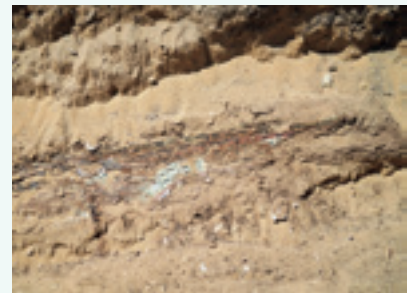


図3 第18王朝の土壙墓（R-052）出土の彩色木棺片 © North Saqqara Project



図2 第18王朝の土壙墓（R-052）と主な出土遺物 © North Saqqara Project



図4 第18王朝初期の「リシ棺」の類例、テーベ西岸出土（メトロポリタン美術館蔵） © Nozomu Kawai

COLUMN

古代エジプトの来世観 Ancient Egyptian View of the Afterlife

エジプトの国土は95%が砂漠であり、人々はわずかな緑地、とりわけ南北に細長いナイル川流域に集中している。農耕・牧畜を基礎とした古代文明がこの地に繁栄したのは、ひとえにナイル川とその毎年の氾濫の賜物である。ナイル川の氾濫は毎年7月頃に始まり、耕地は水没した。そして、氾濫により肥沃な土がもたらされ、土壌に蓄積した塩分は流され、地力が再生し、新たな収穫が約束された。古代エジプト人は自らが生活する肥沃な黒い土が堆積したナイル川流域を「ケメト」と呼び、そこを自らの国とみなした。そこは動植物の生命が育まれる「生」の世界であったが、その東西には不毛の砂漠、つまり「死」の領域があった。この砂漠、とりわけ太陽の沈む（死する）西方の砂漠は、死者が葬られる世界でもあり、まさに「死」の世界であった（図1）。

また、毎日必ず東の空に現れ、天空を航行し、西に沈む太陽のサイクルもナイル川の氾濫のサイクルと同様に復活・再生を象徴するものであった（図2）。古代エジプト人は永遠に繰り返すこのような自然のサイクルから、人間も死後に来世で復活し、永遠の生が得られると考えた。サッカラ遺跡もナイル川の西岸に位置する砂漠にある。一方で、我々が発掘調査をしている遺跡の東側の斜面は、毎朝必ず太陽の光が当たる場所である。古代エジプトの墓が入口を東に向け、ミイラの多くが顔を東に向けているのは死後の復活を信じていたからである。そういう意味でも我々がサッカラ遺跡で発掘調査を行なっている場所は墓地として理想的な場所であり、だからこそ3000年間のさまざまな時代の墓が造営されていたと考えられる。

ところで、古代エジプト人は無条件で復活し、永遠の生命を得られたわけではない。死後復活するには肉体が必要であった。肉体がなければ、死者の靈魂の居場所がなくなってしまうため、肉体を人工的に保存する方法を遺体に施した。それがミイラである。そして、ミイラに宿る靈魂は食べ物を食べ続けなければならなかった。そこで、墓には埋葬室だけでなく、祠堂が造られ、そこに供物が納められた。必ずしも供物の供給が永続するわけではないので、壁画や模型を作って呪術的に祭祀が続けられるようにしたのである。

そして、死者は善人でないと来世で復活することはできなかった。死者は必ず冥界の王オシリス神の前で「最後の審判」（図3）を受け、身の潔白が確認されると、晴れて来世である「イアル（葦）の野」（図4）に辿り着き、永遠の生が得られると考えられた。



図1 ナイル川と耕地と砂漠のコントラスト、ベニ・ハッサン遺跡 © Nozomu Kawai

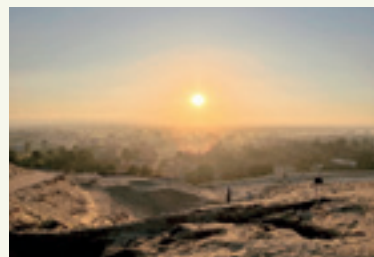


図2 サッカラ遺跡から望む日の出 © Nozomu Kawai



図3 「最後の審判の図」、アニの『死者の書』のパピルス（大英博物館蔵） © Nozomu Kawai



図4 「イアルの野」の壁画、テーベ西岸、センネジェムの墓 © Nozomu Kawai

第5章・末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の墓

Tombs from the Late and Ptolemaic Periods

発掘調査エリアの中でも斜面上部の台地の東端部では、さまざまな時代の墓が検出された（図1）。最古の遺構はまだ全貌が明らかとなっていない初期王朝時代のマスタバ墓である。これについては日干レンガの壁体の一部が数箇所確認された。最も顕著な日干レンガの壁体では、その外側にそれよりもやや大きな規格の日干レンガの壁体が石灰岩ブロックの壁体の上に積まれている。そして同様の壁体は南側と東側にも認められ、壁体の面の下部の延長線上に垂直に掘削された岩盤があることから、これらの壁体がシャフト（^{たてこう}竪坑）の壁体であることが判明した。シャフトの北壁は未発掘であるが、東西の幅は2.6メートルあり、南北の幅はそれ以上の長さになることから、類例から考えると末期王朝時代の大型シャフトと推定される（図2）。このシャフトの発掘調査は次期調査に行う予定である。

さらに西側には新王国時代の土壙墓群が検出されたが、その南側に隣接して末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に年代づけられる土壙墓が発見された。土壙内には、長さ185センチメートル、幅21～31センチメートルの木棺に収められたミイラマスクを被る^{ぎょうが}仰臥伸展葬の遺体が検出された。ミイラマスクの鬘が黄色の下地に赤と青のストライプで装飾されていることから、類例と比較しておそらく第25王朝からプトレマイオス朝時代の間に年代づけられる（図3）。また、マスクの肌の色がベージュであることから、納められた人骨は古代エジプトの美術表現によると女性である可能性が高いが、人類学班の分析結果はまだ出ていない。

これらの新王国時代および末期王朝時代の土壙墓群の東側からは東西方向で長辺2.26メートル、南北方向で短辺1.5メートルの矩形の日干レンガ製の墓が検出された。遺構の壁体上部に残存する日干レンガの積み方から、墓には本来ヴォールト天井（かまぼこ型を特徴とする天井様式）があったと推察される。遺構内より出土した2点の完形土器の年代から墓は末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に年代付けられる。矩形の遺構の中央にはレンガ列があり、レンガ列を外すとその下に男性の遺体の埋葬が確認された（図4）。



図1 斜面上部、台地東端部の発掘調査エリア
© North Saqqara Project

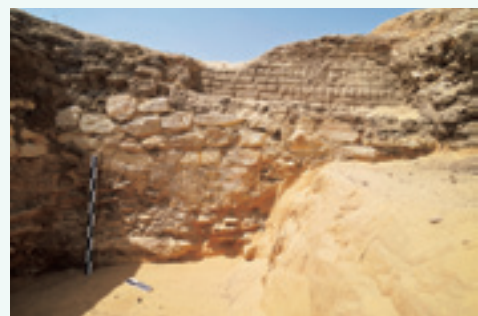


図2 シャフト外観，西壁 © North Saqqara Project



図3 末期王朝時代の土壙墓
© North Saqqara Project



図4 末期王朝時代～プトレマイオス朝時代の日干レンガ墓と埋葬 © North Saqqara Project

COLUMN

ミイラ製作 Mummification

古代エジプト人は死後に再生・復活し、永遠の生命を得ることを望んでおり、そのためには肉体が必要不可欠であった。生物は基本的に死亡し生命活動を停止すると腐敗、消滅へと向かう。その対処として古代エジプトではミイラ製作が行われた。

ミイラ製作はまず腐敗が進みやすい内臓を摘出する。これらの内臓も死体の一部と考えられたため、摘出後にはカノポス壺に入れられた。次にナトロン（炭酸ナトリウム、炭酸水素ナトリウム、少量の塩化ナトリウム、微量の硫酸ナトリウムの混合物からなる塩の一種）で死体を乾燥させる。死体の乾燥後に樹脂や香油などを用いて死体を清める。最後に魔よけの護符や装飾品を身体に挿入しながら包帯を巻くことで約70日間の工程を完了する（図1）。

ミイラ製作の歴史は古く、古代エジプトに王朝が誕生する前の時代である先王朝時代の前3500年頃には樹脂に浸された包帯を巻いた死体が確認されている。その後古王国時代第4王朝期には内臓を摘出していた証拠が確認でき、ミイラ製作が本格化したことが明らかとなっている。さらに新王国時代第18王朝には内臓に加えて脳を摘出することが一般的になっていく。その後第18王朝から第3中間期にかけて、より遺体を生前の姿に近づけるため、義眼を入れたり、鼻に植物を詰めたりして形を整える作業が確認できる。この時期を最盛期にミイラ製作は簡略化していき、微細な工程を変更しつつ古代エジプトの王朝が終了した後もミイラ製作は継続していった（図2）。

ミイラ製作の質は被葬者の階層とある程度、相関関係にあることが知られており、また必ずしも古代の人々全員がミイラ処理を受けていたわけではなかった。我々のサッカラ遺跡の発掘調査では初期王朝時代からローマ支配時代までの約3000年間に及ぶ時期に埋葬された人骨が出土している。調査で出土した人骨を見てもミイラ処理の痕跡が見られず皮膚などの軟部組織が消失して白骨化した遺体もあれば、髪や髭、皮膚が残存し、包帯を巻いて丁寧に埋葬された遺体もある（図3）。我々の調査では、多岐に渡る埋葬習慣を確認することができ、約3000年のミイラ製作史を概観できる貴重な成果となった。



図1 ミイラを製作するミイラ作りの神、アヌビス
© Mizuki Shindo



図2 新王国時代の精巧なミイラ、ユヤのミイラ（カイロ・エジプト博物館蔵）
© Nozomu Kawai



図3 サッカラ遺跡の発掘調査で出土したグレコ・ローマン時代のミイラ
© North Saqqara Project

第6章・グレコ・ローマン時代のカタコンベ

The Greco-Roman Catacomb

2019年、金沢大学とエジプト観光考古省の合同調査隊により、北サッカラ台地の東側斜面で岩盤に穿たれたカタコンベ（地下集団墓地）が発見された（図1）。このカタコンベはグレコ・ローマン時代（プトレマイオス朝時代末期～ローマ支配時代）のとりわけ前1世紀頃から2世紀頃の間¹に集団墓地として利用されたと考えられる。これまでエジプトのカタコンベについてはグレコ・ローマン時代の中心地であったアレクサンドリアのものが知られていたが、サッカラ遺跡では最初の発見である。

カタコンベにつながる通廊は、アーチ形をしたヴォールト天井に覆われており、発見当时には天井付近まで砂が堆積していた。通廊の入口付近の壁には石灰岩のブロックが使用され、階段の中央からカタコンベ入口に向かうにつれてより大きなレンガが使われるなど、工法が変化したようである。さらに、堆積層の観察から、ヴォールト天井を有する通廊は一度崩壊した後に再築が行われたと見られ、当時の盗掘活動の痕跡も窺える。この通廊が建築された年代は定かではないが、通廊を覆うように堆積した土器や人骨から、少なくともローマ支配時代の2世紀頃まで活動が続いたようである。

回廊内部の砂層を取り除いた後に、西側の岩盤に切り込まれたカタコンベの入口を発見した。入口にはまぐさや軒蛇腹（コーニス）^{のきじゃばら}などが備えられていた。軒蛇腹の上には、メネラオスという名の人物に捧げられたステラ（図2）が岩盤に穿たれた窪みにはめ込まれた状態で発見され、カタコンベの内部に由来すると考えられるテラコッタ製像、ランプ、土器も検出された。堆積層の観察から、これらの遺物はおそらく盗掘の際にこの場所に置かれたようである。カタコンベの入口は少なくとも3種類の異なる封鎖壁で閉じられており、複数回に渡る活動があったと考えられる。また入口前には、石灰岩で製作された2体のライオン横臥像が墓の入口を守るように置かれていた（図3）。

カタコンベの内部は、幅約2.5メートル、奥行き約16メートルの規模で、南北に側室を有する（図4）。内部の入口付近は通廊から流れ込んできた砂で覆われており、その表層には大量の人骨、木棺、土器などが置かれていた（図5）。さらに棺の付近からはイシス＝アフロディーテのテラコッタ製女神像が発見されたほか、ギリシア語の碑文が刻まれたデメテリアという女性のステラが発見された。このステラは棺の中で発見されたもので、近くにあった彫刻の施された壁龕（ニッチ）^{へきがん}から落ちたものであると見られる。また2カ所からカルトナーージュ（亜麻布の上に漆喰を塗ったもの）製のミイラマスクが発見された（図6, 7）。南壁には木製板に図像が描かれたタブローとステラが壁に嵌^{はま}った状態で発見された（図8）。カタコンベの内部は現在も発掘調査が続けられており、今後、新たな側室や遺物の発見が期待される。



図1 カタコンベ外観 © North Saqqara Project



図2 メネラオスのステラ
© North Saqqara Project



図3 カタコンベの入口
© North Saqqara Project

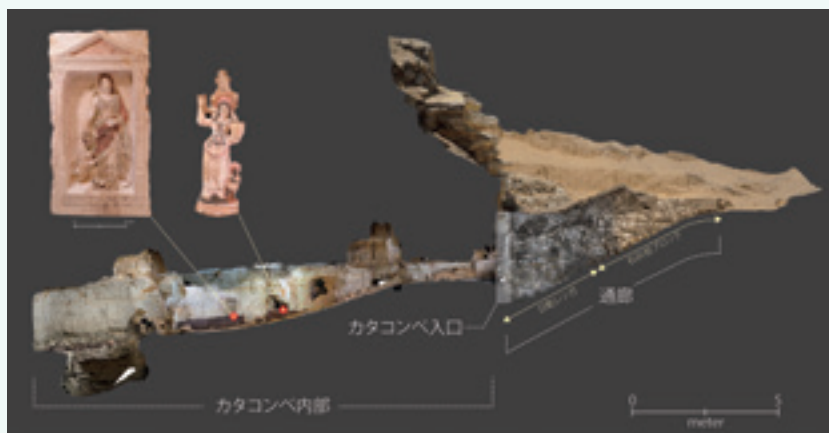


図4 カタコンベ北側オルソ画像エレベーション (立面図) © North Saqqara Project



図5 発見時のカタコンベ内部 © North Saqqara Project



図8 カタコンベ南壁のタブローとステラ © North Saqqara Project



図6 女性のカルトナーージュ製ミイラマスク
© North Saqqara Project

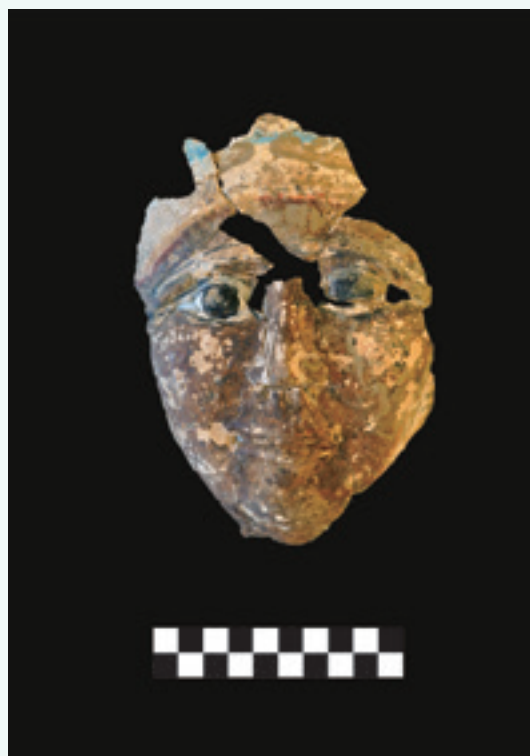


図7 男性のカルトナーージュ製ミイラマスク
© North Saqqara Project

COLUMN

テラコッタ製像 Terracotta Figurines

グレコ・ローマン時代（前3世紀～後4世紀）のテラコッタ製像は、型で整形した後に焼成して製作された土製の人形である。このようなテラコッタ製像は地中海世界で広く見られ、エジプト全土からも多く出土している。また、エジプトにおいては、しばしば住居遺構から出土しているほか、少数ではあるが墓や神殿遺構からも発見されている。住居遺構から発見されたテラコッタ製像は住居の壁龕（ニッチ）に置かれたか、住居内の祠堂とみられる木製の棚の上に置かれたと考えられることから、主に世帯内での信仰を目的に製作されたとみられる。また、墓においては、被葬者のための副葬品あるいは宗教的な目的のための奉納品として使用された可能性が指摘されている。

エジプトにおけるグレコ・ローマン時代のテラコッタ製像は、非常に多くの種類のモチーフやテーマがある。表現されるモチーフやテーマにはエジプトとギリシア・ローマの神々や人間、動物などがあり、特に子供の神であるハルポクラテス神や古代エジプトのイシス女神は数多く見られるモチーフである。中でもイシス女神は、周辺地域の女神と習合あるいは同一視されており、複数の神々の属性を持つことで、エジプトの国境を越えて人気を博した。

サッカラ遺跡のカタコンベ入口上とカタコンベ内部からは、イシス女神とギリシアの豊穡の女神アフロディーテが習合、あるいは同一視された特徴を持つイシス＝アフロディーテ女神のテラコッタ製像が出土しているほか、イシス女神の息子であるハルポクラテス神のテラコッタ製像も発見された。カタコンベ内部の棺の付近から発見されたイシス＝アフロディーテ女神像（図1, ①）は、右手に豊穡の角であるコルヌピア、左手には丸底の椀を持ち、足元にはハルポクラテス神を連れている。カタコンベ入口上やカタコンベ内部から出土したイシス＝アフロディーテ女神像（図1, ②-⑤）は、全て直立した姿勢で表現されているが、それぞれ特徴的な頭部装飾や衣装を纏い、黒髪やブロンズ色の髪で表現されるなど、細部に多種多様な表現が窺える。カタコンベ内部から出土したハルポクラテス神のテラコッタ製像（図1, ⑥）は、ハルポクラテス神がガチョウに乗った様子で表現されている。ガチョウは混沌の神であるセト神の象徴であることから、ハルポクラテス神が混沌をコントロールする様子を示している。これらのテラコッタ製像は、発見時には、もともと置かれていた位置からは移動したと見られるが、特に子供や女性の被葬者のための副葬品として棺に納められたか、あるいは側室の装飾として用いることで、被葬者の守護の役割を担っていたと考えられる。



図1 サッカラ遺跡のカタコンベから出土したテラコッタ製像
©North Saqqara Project

1. 発掘とは何か

考古学は人間が残した物質文化（モノ）や人間活動に関連する自然遺物（動植物遺存体、昆虫、土壌など）をとおして人類の過去を研究する学問である。発掘とは考古学の最も重要な研究手法であるが、物質文化（モノ）や自然遺物を掘り出すための行為ではない。考古学の発掘とは、地中に埋もれたこれらの考古資料を、適正な方法に基づいて掘り出し、考古学的に意味のあるデータとして記録することである。そのためには、考古学者が基本的な技術を習得していることは言うまでもなく、問題意識の深さや多様さ、対象遺跡についての理解や知識が必要となる。そして、十分なデータが記録されて発掘された考古資料は、他の多くの研究者が資料として利用することができる。また、発掘された遺跡は二度と元に戻すことはできないので、慎重に進められなければならない。

2. 発掘のプロセス

①事前準備

まず研究課題に基づいた調査の目的を設定する。その発掘によって何を情報として得るのか、そのためにはどのような発掘技術を用いれば良いのかを事前に整理しておく必要がある。限られた調査費用や期間、人員なども考慮に入れて、その中で目的を達成するためのマネージメントをしなければならない。エジプトのような海外で調査をする場合は、現地の管轄省庁などに申請をして許可を得なければならない。

②踏査

研究の対象とする遺跡の発掘をする前には、踏査を行う（図1）。地表面に散布している遺物を採集して、遺跡の情報を得る。その結果をもとに発掘予定地を絞り込み、物理探査を用いて、遺構が埋蔵されている地点を絞り込む。このようにしていくつかの候補地が絞られる。



図1 踏査の様子

③試掘

いくつかの候補地の中から研究目的を達成するために最もふさわしい場所を選び、試掘を行う。試掘では、地中の堆積状況や遺構の有無を確認するため、一ヶ所を集中的に深く掘り、記録する（図2）。その結果から埋蔵されている遺構や遺物の年代が特定され、本発掘を行う。



図2 試掘で見えられたミイラの発掘

④本発掘

発掘では層位（土の色、内容物、構造など肉眼で認識できる特徴が同じ堆積）、遺構、遺物の出土地点は測量機器や写真などで記録する（図3）。また、発掘で出土した遺構や遺物は必ずしも保存状態が良好ではないので、保存修復師により修復作業が行われる。考古学者は発掘調査による学術的な成果を発信するだけでなく、考古資料を文化遺産・文化資源として保存し、活用することも重要な課題としている。



図3 サッカラ遺跡、カタコンベ前での発掘調査

多岐にわたる発掘調査の作業 A Wide Variety of Archaeological Excavation Work

ここで示した発掘のプロセスは必ずしも直線的なものではなく、ときに複数の作業が同時に進行することも珍しくない。また発掘に関する作業は多岐にわたり、現地の人々やさまざまな専門家の協力を得ながら炎天下のなか行われる。ここでは広範にわたる発掘作業の一部を写真で紹介する。



イシス＝アフロディーテ女神のテラコッタ製像の発掘作業



カタコンベでの測量作業



ミイラの発掘



検出された遺構の写真撮影



カタコンベ内の人骨の取り上げ作業



カタコンベ内部での発掘作業



土墳墓の測量



フォトグラメトリ（写真測量）の作業



ローマ支配時代の土器片の発掘と出土地点の測量



出土したミイラの観察記録作業



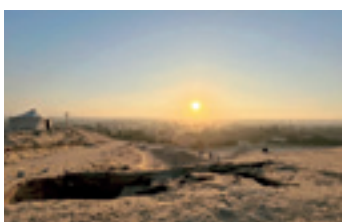
人類学者による人骨の調査



カタコンベ入口前の通廊を覆う日干レンガ製のヴォールト天井の壁の修復作業



石製容器の保存修復作業



発掘現場から見る日の出



斜面上部での発掘作業



発掘調査チーム（2023年3月）

おわりに

金沢大学古代文明・文化資源学研究所とエジプト観光考古省の合同調査隊は、2019年にサッカラ遺跡で初となるグレコ・ローマン時代のカタコンベを発見し、その後約4年間コロナ禍により調査が中断しましたが、昨年2023年夏に本格的な調査を再開し、初期王朝時代からローマ支配時代におよぶ各時代の墓を数十基発見し、国内外に大きく報道されました。本特別展では、このような私たちのエジプトでの考古学調査の最新の成果を発信させていただきました。本展覧会により、より身近に古代エジプト文明を感じ、その叡智を学んでいただくだけでなく、私たちの現地調査での活動もご理解いただければ幸いです。

まずは、本特別展を企画していただいた、金沢大学資料館と関係者の皆様に御礼申し上げます。また、エジプトでの現地調査では学生時代からご指導を賜っております吉村作治先生（東日本国際大学総長、早稲田大学名誉教授）の多大なるご協力をいただいております。ここに記して感謝いたします。これまで調査隊のメンバーとして発掘調査に参加された、近藤二郎先生（早稲田大学名誉教授）、馬場悠男先生（国立科学博物館名誉研究員）、高宮いづみ先生（近畿大学教授）、柏木裕之先生（東日本国際大学客員教授）、坂上和弘先生（国立科学博物館 人類研究部 人類史研究グループ グループ長）、覚張隆史先生（金沢大学助教）、高橋亮介先生（東京都立大学准教授）、阿部善也先生（東京電機大学助教）、村串まどか先生（明治大学助教）、前川佳史先生（東京文化財研究所）、岡田 靖先生（東京藝術大学准教授）、サリーマ・イクラム先生（カイロ・アメリカン大学教授）、カルロ・リンディ・ヌゾッロ博士（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）、ホセ・アルバ・ゴメツ博士（ハエン大学）、竹野内恵太氏（早稲田大学講師）、岡部 睦氏、進藤瑞生氏（金沢大学大学院博士後期課程）などの多くの方々にも御礼申し上げます。

最後に、我々の発掘調査を許可していただいているエジプト・アラブ共和国観光考古省、エジプト考古最高評議会に感謝いたします。特に前考古最高評議会事務総長のムスタファ・ワジリ博士、現事務総長のムハンマド・イスマイル博士、外国調査隊事務局長のナシュワ・ガーベル博士、そして合同調査隊のエジプト側代表でサッカラ査察局局長のムハンマド・ユーセフ博士およびサブリ・ファラグ氏、調査隊の査察官、作業員の皆様方に記して感謝いたします。また、駐日エジプト・アラブ共和国大使館文化・教育・科学局のご支援にも御礼申し上げます。さらに、カタコンベの実物大模型を寄贈してくださった朝日新聞社、レーザースキャン映像をご提供くださった TOPPAN の半田高広氏、岡田亮氏に記して感謝申し上げます。

金沢大学古代文明・文化資源学研究所長
金沢大学新学術創成研究機構 教授

河合 望

協力者・協力機関（五十音順）

朝日新聞社

エジプト・アラブ共和国観光考古省

金沢大学古代文明・文化資源学研究所

金沢大学新学術創成研究機構

駐日エジプト・アラブ共和国大使館文化・教育・科学局

TOPPAN

執筆者

河合 望（金沢大学古代文明・文化資源学研究所長，金沢大学新学術創成研究機構教授，金沢大学資料館教育・展示部門長）

岡部 睦（金沢大学人間社会環境研究科博士後期課程）

進藤瑞生（金沢大学人間社会環境研究科博士後期課程）

主要参考文献

河合 望 2021『古代エジプト全史』，雄山閣

坂上和弘・河合 望（監訳）2021『大英博物館ミイラ展 古代エジプト6つの物語』，朝日新聞社

令和6年度金沢大学資料館特別展

古代エジプト 3000年の墓地进行掘る

— エジプト，サッカラ遺跡発掘調査最新報告展 —

会 期：2024（令和6）年7月25日（木）～10月11日（金）

編集・発行：金沢大学資料館

発 行 日：2024（令和6）年7月25日

印 刷：能登印刷株式会社



科研費
KAKENHI

金沢大学
KANAZAWA
UNIVERSITY